The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コスモポリタニズムの陥穽 ： ロシアにおける反ユダヤ主義の歴史から
Author(s)	ヨコタ村上, 孝之
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 71-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62047
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コスモポリタニズムの陥穽

――ロシアにおける反ユダヤ主義の歴史から――

ヨコタ村上　孝之

「多文化主義」multiculturalismというものがもてはやされていたのは1990年代のことで、今日では欧米の文化・文学研究家の多くはそれに否定的な態度を取っている。これに代わる、あるいはそれを超克する概念として近年、新たな注目を集めているものに「コスモポリタニズム」がある。もちろん、この概念そのものは古典古代に遡るもので、目新しいものではないが、これをグローバリゼーションの時代の新たな戦略として再生させようという動きが起こっているわけである。

哲学者アパイアの著書『コスモポリタニズム』、ホーミ・バーバが編纂した、雑誌『パブリック・カルチャー』の「コスモポリタニズム」特集号（2000年秋第12巻3号）、社会学の領域で近年、非常な影響力を持っているウーリッヒ・ベックの一連の著作などが代表的なものである。

これらはそれぞれ微妙に違った形で「コスモポリタニズム」を定義しなおそうとしているし、それらはまた古代ギリシャのストア派のそれとはもちろん、カントのそれとも大きく異なっている。さまざまなヴァージョンのコスモポリタニズムがあるわけだが、ロシアではそれが、ある、非常にいびつな形で発現した。それは、コスモポリタニズムの一般的解釈からはひどく離れたものであり、また、ロシア以外の文脈ではあまり知られていないものである。本論文では、このロシア限定の「コスモポリタニズム」の考察を通じて、欧米の批評理論におけるコスモポリタニズム理解をどう読み替えることができるだろうかということを考えてみたい。

ここでいう「コスモポリタニズム」とは、ロシア文学・ロシア史研究者には周知の、1940 年代末から1950年代初めに激しく展開された、コスモポリタニズム批判運動におけるそれである。1945年3月24 日にクレムリンで行われた晩餐会の席で、スターリンが、ロシア民族をソビエト連邦における最も先進的な、優れた民族として言祝いだことが、その最初の指標だったとされる。大ロシア主義が公然と支持され、民族主義が容認され、ユダヤ人はこの新しいパラダイムの中の異分子として指弾されるようになる。

反コスモポリタニズム運動の号砲になったのは、1949 年 1 月 28 日の『プラウダ』に掲載された記事だった。この記事は Об одной антипатриотической группе театральных критиков と題されていて、アルトマンやグルヴィッチといった演劇批評家たちが、愛国精神――これは大ロシア民族に対する尊敬という意味だが――を欠き、したがって、ソビエト的演劇を貶め、人民を侮蔑しているという内容のものだった。アルトマンもグルヴィッチもユダヤ人だったので、記事の反ユダヤ主義的性

格は明らかだったが、『プラウダ』の記事を皮切りに、数か月にわたってソ連の新聞・雑誌が反ユダヤ主義運動としての反コスモポリタニズム・キャンペーンを展開した。

コスモポリタニズムとユダヤ性の結びつけは、現代人の目からは唐突な印象を与えるが、帝政期からそのような発想はロシアに存在していた。歴史家オルランド・ファイジーズによれば、シオニズムとコスモポリタニズムの結びつきは、ベリンスキーによって最初に示されたと言う。[1]また、マナセーヴィッチというユダヤ人哲学者・詩人は、1890 年に『ナショナリズムとコスモポリタニズム』という小冊子を著し、ナショナリズムの勃興によってカトリック教会の普遍主義が失墜してしまった現在、古代ギリシャの普遍的人間の理想を実現できるのはユダヤ人であると説いている。その中でマナセーヴィッチはメシェルスキー大公の次のような言葉を引用している。「以前あったキリスト教的な家庭生活の原理やそれへの傾倒、愛国主義、そうしたものをユダヤ人は根無しの（беспочвенный）、あさはかな、原理原則としてはまったく薄弱なコスモポリタニズムに替えてしまった。」（二頁）さらに、マナセーヴィッチは、スヴォーリンが大公の意見に唯々諾々と賛成の意を表していると付け加えている。十九世紀の終わりごろに、コスモポリタニズムをめぐって、活発な言論の交換が行われていたことが分かるし、しかも、それがユダヤ人問題の一環を形成していたことが明らかなわけである。

この言説の歴史は、1940 年代末に反コスモポリタン運動が起こったとき――それはマナセーヴィッチの時代からは半世紀近くを隔ててはいるが――読みの地平を作っていたに違いない、つまり、読者は「ユダヤ人」が名指されていなくても、コスモポリタニズムによってユダヤが含意されていることが、多かれ少なかれ判断できたと思われる。また、『プラウダ』などに載った反ユダヤ主義的な記事は一様に、コスモポリタン文学者たちを「根無しの」бесродный と言って論難したが、これはメシェルスキーらが用いた беспочвенный という言葉を念頭においていた可能性が大いにあると思われる。

『プラウダ』に続いて反コスモポリタニズム運動の論調を継続した『文学新聞』や *Культура и жизнь* は、ユダヤ人名の暴露という形で、反ユダヤ人攻撃を陰湿な形で続けることになる。1949 年 1月 30 日号の『文化と生活』誌では、E・ホロドフ名で書かれている反愛国的な文章はメイエロヴィッチなる批評家のものであるということ明らかにされた。『文化と生活』誌のこの実名暴露は、ほかの新聞・雑誌に飛び火して、2月 12 日号の『文学新聞』では、ヤコヴレフが実はホルツマンであり、メルニコフがメルマンであるという指摘がなされた。その後も、『コムソモルスカヤ・プラヴダ』や『文学新聞』で、ジダーノフがリフシッツ、ステーブンがカッツネルソン、マルティッチがフィンケルシュタインなどという暴露が続けて行われた。

これらの記事の見出しのほとんどが、до конца разоблачим космополитов- антипатриотов（「コスモポリタン-反愛国主義者を徹底的に暴露しよう」）という体のものだったことも注目できる点である。「近頃の批評家に見られるコスモポリタニズムや愛国主義の欠如を批判する」という趣旨の文章でもよかったはずなのである。にもかかわらずこれらの雑誌新聞は、コスモポリタンを摘発（разоблачать）せよと呼びかける。Разоблачение は摘発であるが、そもそも正体を暴露するという意

---

[1] Figes, Orlando. *The Whistpers: Private Life in Stalin's Russia.* NY: Metropolitan, 2007. P. 494.

味であり、これらのメディアによって意図されていたことがはっきり込められていると言えるだろう。

ここで挙がっている文学者たちの、ユダヤ人としての本名であるが、筆者がルードヴィヒ・マクミラン大学のロバート・ストックハッマー教授に聞いてみたところ、どれもユダヤ人の名前のように聞こえる、とくにフィンケルシュタインは、ただし、絶対そうとは言い切れない、つまりドイツ名である可能性も排除できないということであった。本名を明かすことは、ユダヤ性の表出ではあるわけだが、それと同時に、この「ユダヤ性」というものは、かっこ付きのものでもある、つまり、それはユダヤ人のアイデンティティーを完全に表現はしていないわけである。それは、これらの名前がもともとイディッシュ起源のものだと考えることができるからだろうが、イディッシュはゲットー・ドイツ語の謂であり、「純粋な」ユダヤ人の言葉ではない。このように、ユダヤ性の暴露というものが、非ユダヤ的なものを通して行われるという逆説がここにはある。もちろん、コスモポリタニズムはソビエト連邦以外の国・文化、具体的にはブルジョア的西欧との結びつきとパラフレーズされていたから、ユダヤ人の本名がドイツ風に響くことは、反コスモポリタニズムの趣旨にまさにかなっていたわけである。

本名の暴露という行為であるが、ロシア革命のリーダーたちのほとんどは偽名を使い、そのままそれを使い続けたという事実を考えると、なお皮肉なものと感じられる。ソロモン・シュヴァルツという歴史家は次のように総括する。

> ユダヤ系も非ユダヤ系も含めて、共産党幹部の多くは本名とは別に、革命用の偽名を付けており、そちらの方が有名だった。ロシア帝国の秘密警察の追及を逃れるための、革命以前の偽名には非常に高い価値が付与されるようになり、はじめは某こと某というような言い方をしていたのが、やがて偽名だけで呼ばれるようになってしまった。革命後は習慣から言っても、法律から言っても、偽名のあとで本名を明らかにすることは要求されなかった。そもそも本名をくっつけてしまえば、偽名をつける意味はなくなってしまうのだ。したがって、反コスモポリタニズム運動において本名がわざわざ明かされたのは、これら「コスモポリタニスト」が非ロシア人であり、異国人であることを示す狙いがあったのである。(『ソビエト連邦のユダヤ人』360 頁)

この、歴史家シュヴァルツの発言は、革命を戦い抜いた共産党幹部の一人であるスターリンが、反コスモポリタニズム運動を開始し、主導したことを考え合わせると、さらに皮肉に聞こえる。「スターリン」もレーニンがそもそもウリャーノフであり、トロツキーがブロンシュタインであったように、ジュガシヴィリの、またの名だった。スターリンはとくに多くの偽名を使っていたことが知られている。

スターリンは父親が、甲斐性がなく、母親の稼ぎで育ちったが、そうした父親に対して否定的な感情を抱いており、ジュガシヴィリの名を喜んで捨てたことは、アイザック・ドイチャーら伝記作者によって指摘されるところである。偽名をつけることは、単に秘密警察の追及を逃れるだけのためではなく、父を克服し、決別することを意味していた。そして、それはグルジア人としての民族的アイデンティティーを清算することをも意味していたはずである。皮肉な言い方をすれば、自己の民族アイデンティティーを捨てて、諸民族の自立と融和を説いたスターリンこそ、真のコスモポリタンであったと言

えるだろう。

ナショナリズムと父権制・家父長制の相互補完性はフェミニズムなどの文脈ですでに語りつくされているテーマであるが、スターリンも父を、そして、グルジアを超克して、コスモポリタンとなったわけである。だが、彼はマルクス主義にそもそもあったインターナショナリズムを修正し、たわめてもいるので、こうして「諸民族の父」と呼ばれるようになったスターリンはナショナリズムの権化でもある。この逆説は、ナショナリズムとコスモポリタニズムが本来、対立する概念では必ずしもないことを示しているように思われる。

インターナショナリズムというものは、ナショナリズムを超克する概念としてナショナリズムの確立以降に形成されたのではなく、逆に、「国際的」なるものの認識、つまり、国際的交通・接触の結果、「ネーション」が認知されるにいたったのだということは、近年、多くの思想家・政治学者・文化史家によって主張されていることである。日本では柄谷行人が『終焉をめぐって』で日本の「近代化」をめぐって、そのような説を唱えている(「一九七〇年＝昭和四十五年」)。コスモポリタニズムとインターナショナリズムはマルクス・エンゲルスの『共産党宣言』の中でも明確に区別されており、この二つを簡単に混同することは危険であるが、ナショナリズムに対するアンチ・テーゼであるという共通点でとりあえずくくるならば、ナショナリズムとインターナショナリズムとの間の相互補完関係と同じような関係が、コスモポリタニズムとナショナリズムの間にも見てとることができるのではないかと思われる。

だとすれば、今日の文化・文学研究においてもてはやされているコスモポリタニズムという概念の問題性・アポリアが、そこにすでに露呈しているといっていいだろう。つまり、コスモポリタニズムは民族的アイデンティティーを前提として上での、リベラリズム(多文化主義)にとどまるのではないかと考えられるわけである。

コスモポリタニズムとナショナリズムのこうした共犯関係を認めるならば、ユダヤ人がコスモポリタンだと言った十九世紀の思想家たちは――ユダヤ人も非ユダヤ人も含めて――すでにナショナリズムの言説に取り込まれていたと考えることができる。何度も引用している、雑誌 *Public Culture* のコスモポリタニズム特集号で、編者のホーミ・バーバは、コスモポリタニズムがナショナリズムを超克するための有効な装置であるが、その形態は多様でありえて、特定のものに限定する必要はなく、また、そのうちの何かを排除する必要もないと述べている。コスモポリタニズムとナショナリズムが相互補完的概念ではないかと先に指摘したが、その立場からすると、バーバの議論の前半にはすでに疑義があるわけだ。そして、後半の、さまざまなコスモポリタニズムを認めるという立場だが、本発表で見てきた、反ユダヤ主義を記号内容とするコスモポリタニズムも、バーバの見方からは、排除することはできないこととなる。

バーバその人は望むべきコスモポリタニズムのあり方として、vernacular cosmopolitanism という定式を提案している。これは、彼によれば、ローカルなコスモポリタニズムの可能性を模索するものであり、また、「自分がインド人であることと、自分が世界市民であることの間の選択を拒否する」立場だと言う。しかし、このような定式は、コスモポリタニズムとナショナリズムの相互補完的関係をまさに示しているように思われる。コスモポリタンであるためには、ある特定の民族に属することを自覚しな

いとならないわけである。同じように、十九世紀から二十世紀の思想家、そして、反コスモポリタニズム運動の担い手たちも、「彼はユダヤ人である。まさにそれがためにコスモポリタンである」という発想をした。コスモポリタズムがナショナリズムの解体に有効であるとするならば、コスモポリタニズムとナショナル・アイデンティティーの完全な切り離しこそ要請されているのだ。その意味で、皮肉な話だが、グルジア人であることを放棄し、諸民族の父となったスターリンは、むしろ、そこに近いところにおり、やはり真のコスモポリタンであったのかも知れない。また、反コスモポリタニズム運動で批判された、同化ユダヤ人たちもそうだったのだろう――彼らはコスモポリタンと名指される以前の、ユダヤ人としてのアイデンティティーを、ほとんど失っていたから。そのような意味で彼らはコスモポリタンであったと言えると思われるが、しかし、その彼らをロシア人たちが「これらユダヤ人はコスモポリタンであった」という記号作用に取り込みなおすとき、この vernacular cosmopolitanism は、やはりネーションのパラダイムにからめとられ、ユダヤ人はユダヤ人と呼ばれることによって、民族的アンデンティティーを再構築し、そのコスモポリタニズムは崩壊せざるをえないのである。コスモポリタニズムは、依然として、アポリアそのものでしかないと言える。

このことは、反コスモポリタニズム運動で弾劾され、抑圧された文学者たちが、必ずしも運動を反ユダヤ主義の発現とはとらえてはいない、少なくともとらえているような書き方はしていないことと関係しているように思われる。『プラウダ』に反愛国主義者・コスモポリタンと名指された演劇批評家の一人ボルシャゴフスキーは、1991 年になってようやく、『運命の悪戯っ子の手記』という回想録を出して、反コスモポリタニズムの舞台裏を叙述した。しかし、彼はスターリンの意向を反映して、ファジェーエフなりシモノフなりといった関係者たちが、どう振舞っていったか、いかざるをえなかったかということに叙述を集中させており、運動の反ユダヤ的性格とその意味については、ほとんどその関心は向けられていない。ホロコーストを告発する『人生と運命』の著者グロスマンでさえ、1970 年に『万物は流転する』を刊行して、その中で反コスモポリタニズム運動のありようを批判したさいにも、この運動をスターリン主義の一般的に非人間的・抑圧的性格によって説明するのみであり、ユダヤ人差別の要素を読み込んではいない。彼の文章は、自由、人間、民主主義といったヒューマニズムの概念で彩られており、スターリン主義とは、それらを否定する非人間的原理であり、そこから反コスモポリタニズムは出来したという理解なのである。[2]

ここで話をコスモポリタニズムとナショナリズムの相互補完性という問題に戻そう。バーバの vernacular cosmopolitanism の主張は、ヴァーナキュラーなものとコスモポリタンなものあいだの選択を拒むという点にあるが、このような定式化は、われわれが、「世界」への帰属と、特定の「ネーション」への帰属を両立させようということであり、こうしたアイデンティティー・ポリティックスに拘泥するかぎり、ナショナリズムは解体できない、そして、ロシアにおける反コスモポリタニズム運動の経緯は、このことの証左になっていると思われる。

バーバは、しかし、*Location of Culture* という論文集に収められた、“Sly Civility”という論文では、

---

2 もちろん、彼らが人種問題については政治的に沈黙していただけだという可能性は大いにある。海外で自由な発言を行っていたソルジェニーツィンが、1968 年になっても、『煉獄の中で』で、反ユダヤ的発言を繰り返し、反コスモポリタニズム運動についても完全にそれを支持する論を展開している。スターリンとソルジェニーツィンのこの思想的共闘も興味深い歴史の逆説だと言える。

次のようなことを言っている。植民者 colonizer は被植民者 colonized に自己の分身を見る。彼はそれに恐れを感じるが、その恐れは、民族と土地の、一般的に想定されている結びつきを絶つ働きをする。それは、植民者に、自分はなぜここにいるのかという思いを抱かせるから、つまり、彼は、自分が、自分が本来いるべき土地にいないことに気付くからであると。

これは、一見、サイードのオリエンタリズムの議論に逆らっているようだが、実は一致している。植民者が恐れを抱くのは、異質なもの、エキゾチックなものに対してではなく、同質なもの、自分そのものに対してなのである。他者を異質なものにし、属領においやることで、オリエンタリズムは成立し、植民者の主体は安定するからである。

植民者が被植民者に自分自身を見るのは、被植民者が植民者を模倣しようとするからで、バーバの広く知られた mimicry の理論がここでの議論の前提となっているわけだが、バーバの理論構成は、ソ連の 1940 年代から 1950 年代にかけてのユダヤ人問題の理解に示唆を与えてくれるように思われる。ソ連のユダヤ人社会は内なる植民地を形成していたと考えていいだろう。そして、被植民者である彼らは、革命後の数十年の間に急速に同化、すなわちロシア人・ロシア文化・ロシア語を模倣するわけだが、1950 年代の反ユダヤ主義の高まりは、ロシア人の、こうしてロシア化しつつあるユダヤ人に対する恐怖が根底にあったのではないかと思われる。そして、その恐怖は差異の顕在化、すなわち、イディッシュの禁止なり、シナゴーグの閉鎖なり、ユダヤ教の祭礼の禁止なりという形では、1950 年代にはすでに行えなくなっていた。ロシア人に残っていたのは、空の記号と化していたユダヤ名の暴露という空しい作業だけだった。

植民者は他者ではなく、自己そのものを恐れる、バーバのこの知見を応用するならば、反コスモポリタニズム運動の新しい意味を読み込むことができるだろう。大ロシア人たちは、ユダヤ人という他者を恐れて、反ユダヤ主義運動を展開したのではなく、そこに「ロシア人」を見ることを恐れ、それを異質な他者に戻すために反ユダヤ主義運動を行ったのだと。他者にすることが必要であったのだと。しかし、皮肉なことは、反コスモポリタンニズム運動を推進したスターリン自身が、ロシア人を模倣しようとしていたことだ。スターリンは、そこに、模倣する自分をさらに模倣する他者の姿を見て、恐れておののいていたのかも知れない。

しかし、ジュガシヴィリをスターリンと改め、ロシア語を話しても――ちなみに、土地と言語というのは、スターリンの、修正主義的なマルクス主義的の民族理論における、民族的アイデンティティーの二つの根幹であるわけだが――スターリンのグルジア訛りは彼のロシアへの同化を阻止する。アイザック・ドイチャーはスターリンが初めて公の場に登場した、フィンランドにおける社会民主党大会での、スターリンのパフォーマンスを次のように描写している。「ヘルシンキの大会でのこの場面は尋常ではなかった。というのも、ロシア政府を代表して、歴史的正義を実現しようとしていた男は、自分自身ロシア人ではなく、ツァーの専制に苦しんでいた小国の人間だったからだ。彼の演説は華やかな修辞的表現に満ちていたが、それをスターリンは淡々と、劇的効果も考えずに行って、それが奇妙なコントラストをなしていた。演者はその単調なロシア語の文章をもごもごと不明瞭に読み上げ、しかも、はっきりとした外国訛りがむき出しだった。」(181 頁)もちろん、このときのスターリンのグルジア訛りのロシア語は、彼の戦略であった可能性もあるが、彼はその後、ソビエト連邦の指導

者になった後も、グルジア訛りから解放されることはなかった。スターリンにとって、ロシア語を母語として話す同化ユダヤ人は羨望の的であったのかも知れない。

今、反コスモポリタニズム運動の歴史的文脈からは外れるのだが、こうした見地から、ユダヤ人マンデルシュタームのスターリン頌歌を読み直すことができるかも知れない。それは、マンデルシュタームの意図を再検討するという意味ではなく(『頌歌』は 1937 年の作品であるから)、反コスモポリタニズム運動から照射して、この頌歌を新たな読みへと開かせるという意味においてである。

亀山郁夫は『磔のロシア』で、この頌歌に、スターリンに同化しようとするマンデルシュタームの意志を読み取っている。これまで行ってきた反コスモポリニタニズムとスターリンの関係の再検討を踏まえるならば、逆に、スターリンがマンデルシュタームに自分の分身を見ていたという解釈も可能だろう。亀山も言うとおり、二人は同じファースト・ネームを持つわけだし、そして、もし、スターリンはユダヤ人に、ロシア人に同化しようとする自分の姿を見て無意識下の恐れを抱いていたというような考えが許されるのならば。

だとすれば、頌歌の第二連の末尾、「彼は山に生まれ、牢獄の苦しみを知っていた。／彼をスターリンではなく、ジュガシヴィリと呼びたい」という二行は、実に、マンデルシュタームが、反コスモポリタニズム運動において行われた、本名、つまり、本当の「民族」名の暴露という作業を、この詩の中で先取りしてスターリンのために行ってみせたのだと読むことも可能であるように思われる。

ところで、『スターリン頌歌』に見られる、「グルジア人」スターリンと、「ユダヤ人」マンデルシュタームの応酬は、とっぴな連想に思われるかも知れないが、現代の、もう一人のグルジア出身の「ロシア人」へわたしたちを導く。それはボリス・アクーニンである。周知の通り、彼はトビリシ出身で本名はグリゴーリー・チュハリティシヴィリだが、幼くしてモスクワに移住した。彼のこうした非ロシア的な出自を、彼を批難する材料に使おうとするロシア人がいるようで、彼のグルジア人の本名を暴露するような文書が流布したりしている。それに応えるように、アクーニンは、非常に幼いころからロシアに移住したので、自分は生粋のモスクワっ子と言ってよく、ロシア語・ロシア文化に依拠する者だというアポロギアを繰り返している。そして、これも周知の通り、彼は優れた日本文化研究者であり、チュハリティシヴィリの名で多くの日本研究を発表しており、ペン・ネームのアクーニンが日本語の「悪人」のもじりであることも、われわれのよく知るところである。ところが、これは彼の伝記のあまり知られていない部分なのだが、アクーニンはユダヤ人とのハーフであり、母親はユダヤ人なのである。イスラエルの法律に従えば、母親がユダヤ人であるものはユダヤ人であるから、アクーニンはユダヤ人であるという言い方も十分、許されるわけである。彼のユダヤ人としての出自を「暴露」する言説も、やはり行われている。こうして、アクーニンを「ロシア人」と呼ぶことも、「グルジア人」と呼ぶことも、「日本人」と呼ぶことも、「ユダヤ人」と呼ぶことも、それぞれに根拠があることになる。もちろん、アクーニン自身は、自分がロシア語を話すロシア人だと認識しているから、彼を「ロシア人」と呼ぶべきなのかも知れないが、その種のアイデンティティー・ポリティックスの問題点はすでに指摘したところである。アクーニンはグルジア出身であることのために逮捕されたこともあり、また、ロシアとグルジアの紛争に際してグルジアよりの発言をしたことに対して、ロシア民族主義者から、グルジアとロシア人の混血として非難されたこともある。アイデンティティー・ポリティックスは、アクーニンの自己規定を無効

にしてしまう、つまり、「ユダヤ人」なり「グルジア人」なりというレッテル貼りの前にそれは力がないわけだ。反コスモポリタニズム運動においてそうであったように。リアル・ポリティックスにおいては、民族性とはしばしば自己ではなく他者によって形成されるのである。

このように、わたしたちは反コスモポリタニズム運動が、ロシアでは 2010 年の現在でも継続しつつあることを見るのである。それが、たとえば、スターリンと同じグルジア出身のアクーニンにおいて展開されているのは、興味深い歴史的符合だといえるだろう。アクーニンはそのペン・ネームを決める際にバクーニンを念頭においていたらしいが、「悪人」アクーニンの響きの中に、彼がスターリンを全く考えに入れていなかったのかどうか、想像をたくましくせざるを得ない。

参考文献

邦文

亀山　郁夫『磔のロシア――スターリンと芸術家たち』岩波書店　2002 年
柄谷　行人『終焉をめぐって』福武書店　1990 年

欧文

Appiah, Kwame Anthony. *Cosmopolitanism: Ethics in a World of Strangers*. NY: Norton, 2006.
Arendt, Hannah. *The Origins of Totalitarianism*. San Diego: Harvest, 1973.
Beck, Ulrich. *Cosmopolitan Europe*. Tr. by Ciaran Cronin. Malden, MA: Polity P, 2007.
Bhabha, Homi. *The Location of Culture*. London: Routledge, 2004.
Deutscher, Isaac. *Stalin: A Political Biography*. London: OUP, 1949.
Figes, Orlando. *The Whispers: Private Life in Stalin's Russia*. NY: Picador, 2007.
Roi, Yaacov, ed. *Jews and Jewish Life in Russia and Soviet Union*. Ilford, Essex UK: Frnak Cass, 1995.
Schwarz, Solomon. *The Jews in the Soviet Union*. NY: Arno, 1972.

露文

Борщаговский, А. Записки баловня судьбы. М. Советский писатель. 1991.
Костырченко, Г. Сталин против «космополитов». Власть и еврейская интеллигенция в СССР. М. 2010.
Манасевич, Ю. Национализм и космополитизм. СПб. 1890.